

高等学校における学校全体で取り組む通級による指導

－行事参加を促す連携指導事例－

土居内 香江¹⁾, 松本 秀彦²⁾

1) 高知県立高知北高等学校

2) 高知大学大学院総合自然科学研究科教職実践高度化専攻

Resource Room Instruction in High School, Cooperation between the Resource Rooms and the Regular Classrooms Teachers: A Case study of Event participation promotion instruction.

DOIUCHI Kae¹⁾, MATSUMOTO Hidehiko²⁾

¹⁾ Kochi Prefectural Kita High School

²⁾ Kochi University Graduate School of Integrated Arts and Sciences,

Professional Schools for Teacher Education

要 約

高等学校における通級による指導の効果を高めるために必要と考えられる通常の学級との連携について検討し、通級指導の体制を国立特別支援教育総合研究所³⁾の「通常の学級と通級による指導の学びの連続性を実現するための6つの提言」に基づいて作った。また、ホーム担任・教科担当教員と連携して通級における指導での指導目標を通常の学級で発揮できるように工夫した。その結果、指導目標とした行動が学級や学校行事で般化した。本稿では、1名の生徒を対象に実践報告を行った。“6つの提言”による指導体制構築、通級による指導と通常の学級との密な連携は、生徒の行動変容に有効な方法であることが示された。

キーワード：通級による指導, 高等学校, 指導体制構築

1. 問題と目的

「学校教育法施行規則の一部を改正する省令等の交付について」（文部科学省,¹⁾により、高等学校における通級による指導が制度化されることが示され、平成30年度よりこの制度の運用が始まった。高知県内では、令和2年度開始の本校を含めて現在4校が取り組みを進めている。

通級による指導は、高等学校において初めて障害のある生徒に対する特別の指導が認められることとなったため、先行して行われている小・中学校の通級による指導とは異なり、高等学校としての通級による指導の在り方を構築することが必要である。『高等学校教員のための「通級による指導」ガイドブック 押さえておきたいQ

&A』²⁾によると、高等学校における通級による指導は、学校や学級全体から小集団、個別の指導・支援までの通級による指導を生かす校内体制を構築し、計画的に取り組むことが重要と示されている。国立特別支援教育総合研究所³⁾の「通常の学級と通級による指導の学びの連続性を実現するための6つの提言」には、提言1「情報交換・情報共有の方策の検討」、提言2「授業を見合う体制づくりと工夫」、提言3「学校全体の取り組みとして展開」、提言4「地域のリソースの活用と連携」、提言5「研修の工夫」、提言6「校長のリーダーシップと教育委員会のバックアップ」が挙げられている。

そこで本研究では、高等学校における通級による指導を実践するにあたり、個別のニーズに基づいて行われる通級による指導での成果が、生徒が多くの時間を過ごす

通常の学級に生かされることを目指し、通級による指導と通常の学級が連携するため、ホーム担任・教科担当教員等と連携した支援体制や支援方法、それらの効果の検討およびそれらの課題を明らかにすることを目的として実践研究を行った。

2. 方法

(1) 対象

X 県立 Y 高等学校の通級による指導の対象生徒 A とした。

(2) インフォームドコンセント

生徒 A と保護者に対して通級指導教室とは何か、指導により期待されるメリット、指導スケジュール等を説明した。また、研究機関との取り組みであることと関連して研究発表を行う際には個人が特定されないような形式で行われること、在籍する学級に関係する教員には指導協力のために必要な情報を開示することを説明した。生徒 A と保護者からの質問に回答し、研究参加同意が得られ、書面にて承諾を得た。研究実施においては学校長の許可を得た。

(3) 支援体制構築

通級による指導と通常学級の連携した指導が効果的に行われるための要件について、下記の 6 つのポイントにしたがって支援体制を構築した (図 1)。

提言 1 「情報交換・情報共有の方策の検討」

提言 2 「授業を見合う体制づくりと工夫」

提言 3 「学校全体の取り組みとして展開」

提言 4 「地域のリソースの活用と連携」

提言 5 「研修の工夫」

提言 6 「校長のリーダーシップと教育委員会のバックアップ」

入学後に中学校への聞き取りや引き継ぎ資料に基づいて生徒支援委員会を開き、支援ニーズを整理して生徒の実態観察を行った。実態観察においては行動観察、担任・各教科担当者への聞き取り後、学年会や授業担当者会に配慮の依頼をした。一定期間経過後に生徒支援委員会を再度開催して、通常の授業の中の支援では行動変容が小さいだろうと推測される生徒を通級委員会で検討し、家庭に通級指導教室を利用することを提案した。本人および保護者が通級指導教室利用を承諾したのちに、支援内容と方法を検討し、環境調整・各教科等協力要請を行った後、通級指導を開始した。通級指導においては肯定的フィードバックをこころがけ、通級指導教室以外の場面で般化できるように学校全体の教育活動と家庭と連携し

た。随時、支援状況を教員に報告し、通級指導の指導成果について校内研修会で全体に報告した。

(4) 実践期間

指導期間は 20XX 年 4 月～20XY 年 3 月であった。

本研究では、通級による指導の対象生徒の実態把握と授業実践を 1 年間取り組んだ。1 年間の I 期から III 期に分けた。I 期は 4 月 7 日～5 月 7 日、5 月 18 日から 7 月 3 日の「実態把握期」とし、授業観察や関係する教員から聞き取りを行った。II 期は 7 月 6 日から 9 月 23 日の「プレ通級導入期」とし、筆者が通級による指導の「授業者」として実態把握を続けながら、生徒 A に必要な支援を始めた。III 期は 10 月 1 日から 3 月 2 日までの「通級指導実践期」とした。

(5) 生徒の実態把握

中学校への聞き取りによると、生徒 A は高校入学以前に通級による指導等の支援は受けておらず、初めての活動は他の生徒と同様に活動することが難しいということだった。I 期の実態把握期の観察から生徒 A は、真面目な態度で授業に取り組んだが、授業や行事では体験したことがないことや事前説明が十分にされないに参加できなかった。また、登校したときに「おはよう」とあいさつをされても、あいさつを返すことができなかった。

(6) 学級と連携した指導

生徒 A への指導は、週 1 回 20 分程度で通級による指導用の教室で通級指導担当が実施した。I 期は、担任や各授業担当教員からの聞き取りを行い、生徒 A が授業や行事に参加しやすくなる支援方法の検討や支援の協力要請をするための「授業担当者会」を行った。通級委員会は、一斉指導で可能な個別の支援を各授業担当や担任が行うだけでは、生徒 A の抱える困難さが十分に改善できないと判断し、担任や授業担当教員と連携した通級による指導を開始した。

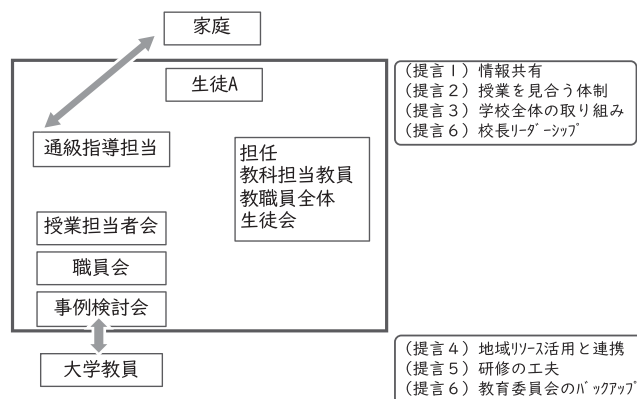


図1 通級による指導の支援体制

(7) 指導目標と指導方法

実態把握から通級による指導目標は、①生徒 A が様々な行事に参加できるようになること、②上手なコミュニケーションのきっかけになる「担任へのあいさつ」ができるようになることとした。

行事への参加については、見通しを持つために、行事の前には具体的内容を説明し、生徒 A から疑問点を聞いた。担任との交流ノート「あったかノート」にもその質問を書くように指導した。行事の主担当教員あるいは生徒会など関係する部に生徒 A の不安点・疑問点を授業者が質問し、配慮方法を検討した。行事参加への評価を、「5：その場で説明を聞いて参加できる」、「4：事前に自分で質問して参加できる」、「3：事前に担任・通級で説明があれば参加できる」、「2：事前に担任・保護者が説明すれば参加できる」、「1：参加できない」とした。「あったかノート」は質問回数をカウントした。

「担任へのあいさつ」の指導は、通級指導の時間に担任が数回同席し、生徒 A と担任とのコミュニケーションのきっかけづくりを行なった。生徒 A は自分の声が相手に届いているのか、相手に届く声の大きさはどれくらいかを気にしていたため、声の大きさを測定できるアプリで声の大きさを計測して相手に届く声の大きさを確認した。また、お辞儀をすることであいさつの代わりとすることを初歩段階のあいさつとして採用し、教室に入ったときに担任からあいさつを行い、生徒 A はお辞儀を返すことができるように練習した。

3. 結果

(1) 行事参加

生徒の行事参加の変容について、5段階の評価尺度で評価した結果を図2に示した。ここでは「連携」の観点で結果を述べる。

1点目の支援は「家庭との連携」であった。I期の実態把握期の当初、全体での説明が中心であったため行事参加ができなかった。教科書購入は、自分の教室(4階)から教科書販売を行っている教室(1階)へ引換券と教科書代を持って移動し、購入する時間であったが、生徒 A は席から動くことができなかった。事前の説明があれば参加しやすいということだったので、4月のレントゲン撮影は、担任が事前の説明を度々行い、保護者も家庭で説明したため、参加することができた。

2点目の支援は「ホーム主任との連携」であった。4月と9月のロングホームルームの時間に行われるホーム役員決めは、クラスごとに割り当てられた係の担当を決める時間であった。全員いずれか1つ仕事をすること、前の黒板に名前を書きに来ることを指示したが、生徒 A はその場から動くことができなかった。9月の役員決めは事前に担任と当日の流れを打合せし、プレ通級指導の時間に仕事内容を説明し、どの役員をやりたいかを考えて準備したところ、ロングホームルームの時間に自分から黒板に名前を書きに行くことができた。

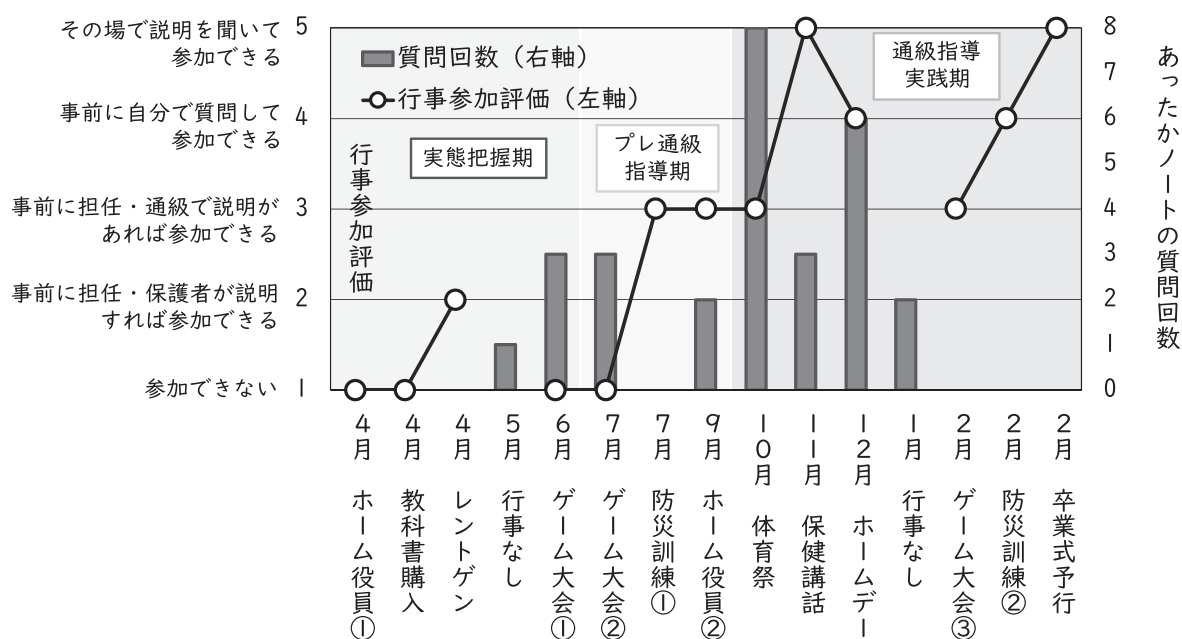


図2 行事参加の行動評価(左軸)と「あったかノート」に書かれた行事についての質問回数(右軸)

3点目は「引継ぎの連携」である。中学校からの聞き取りによると防災訓練は動けなくなるということであったので、Ⅱ期のプレ通級指導期の指導時間に防災訓練の内容を詳しく説明し、当日の行動を練習した。その結果、当日は他の生徒と一緒に落ち着いて訓練に参加することができた。2回目の2月の防災訓練は、通級指導の時間に生徒Aからの質問事項に答えるだけで当日参加することができた。

4点目は「学校全体との連携」であった。10月の体育祭は、選手登録、係の会、準備、片付けなど初めてのことが多く、参加が難しいことが予想された。ロングホームルームの時間に選手登録をすることができるように、通級指導の時間に競技内容を確認し、どの競技に出場したいかや他の生徒の状況により自分の希望通りにならない場合のために、第3希望まで決めて準備した。当日は担任との打合せ通りに選手登録をしたところ、他の生徒の様子をうかがいながら自分の競技を決めることができた。出場競技が決まったのは、競技の練習を体育の授業で行うことや、通級指導の時間に競技で使用する器具を体育科の先生に用意してもらうことを依頼し、通級指導の時間に事前に練習した。生徒会の案で行う競技は、その場で判断してゴールを目指すものであった。そのため生徒Aはとても不安な様子であったので、事前に授業者が生徒会に内容を聞き、通級指導の時間に内容を確認することで競技に参加できた。担任にも通級指導の時間に行った競技練習に立ち会ってもらい、通級指導以外の時間にも聞きたいことがあれば、担任にも質問ができるようにした。多くの関係者に協力依頼して支援を行った結果、生徒Aは体育祭に参加することができた。体育祭後の感想に、「他の競技を見るのも楽しかった。」という記述があり、事前に準備することで生徒Aが安心して競技に参加することができるだけでなく、体育祭を楽しむ余裕ができたものと考えられる。その他の行事についても、通級指導の時間に生徒Aに対して説明が必要な行事を質問し、その質問に答えるだけで参加できるようになった。

生徒Aと担任のあったかノートでの質問回数を図2(右軸)に示した。行事に参加しやすくするための支援として「あったかノート」を利用した。あったかノートはその日あったことを書き、担任に毎日提出することになっている。直接聞くことが難しい場合は、あったかノートに書いて質問することもできると生徒Aに声をかけると次第にあったかノートに書いて質問することができるようになった。生徒Aが活動の参加に不安を示した10月のあったかノートの質問回数が最も多かった。

(2) 上手なコミュニケーションの支援「あいさつ」

Ⅰ期の実態把握期には担任からのあいさつや質問について返事を返すことが難しかった。副主任である通級指導の授業者の質問に応じることはできていたので、行事参加のために必要な説明などの際には担任と一緒に支援を行い、通級指導の時間には担任も数回同席し、生徒Aと担任のコミュニケーションのきっかけづくりをし、担任と連携しながら指導を行った。あいさつができない理由を通級指導の時間に質問すると、生徒Aが自分の声の大きさに自信がないことや相手に届く声の大きさがわからないことがわかった。そこで、声の大きさを測定できるアプリで生徒Aの声の大きさを計測することや色々な音の大きさを示して生徒Aの声の大きさが十分相手に届く大きさであることを確認した。また、あいさつの方法についての学習では、声を出してあいさつすることが難しいが、お辞儀をすることであいさつの代わりとすることならばできそうだということだったので、担任からあいさつをしてもらうよう依頼し、10月はお辞儀をしてあいさつできることが増え、11月以降は担任に対してお辞儀をしてあいさつをすることができるようになった(図3)。担任以外に対してもお辞儀をしてあいさつをすることができる場面があり、通級での指導が他の学校生活でも生かされるようになった。

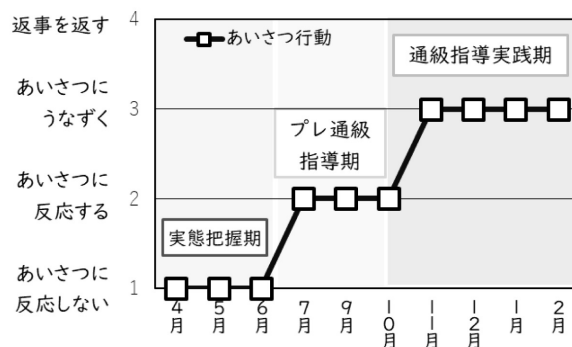


図3 あいさつ行動の変化

4. 考察

(1) 行事参加が促された要因

1点目は、様々な活動に参加するための支援は、授業担当者会等を行い、情報共有をしたことである。Ⅰ期に授業担当者会を行い、中学校への聞き取り内容を再確認すると同時に今の様子から必要な支援内容を検討し、有効な支援を共有した。また、生徒Aへの支援を職員会でも周知し、多くの教員に配慮してもらえよう依頼した。このように生徒Aへの支援ができるよう通常の学級の環

境を整えることで、Ⅲ期にはわからないことを自分から質問し、授業の活動により参加できることが増えた。このように、実態把握のために関係者から聞き取りをしたことは提言1「情報交換・情報共有の方策の検討」に関する成果で、通級担当が授業参観を依頼したことは提言2「授業を見合う体制づくりと工夫」に該当する成果である。

2点目は、担任とのコミュニケーションを促進することによって、各教科の担当に聞くことができない場合にも担任の先生を通じて質問することができるように支援し、安心して行事参加や授業参加ができるようにしたことである。

3点目は、提言3「学校全体の取り組みとして展開」に関連して、具体的な支援を各教科や特別活動の担当が連携して行い、学校全体としての実践になったことである。

4点目は、体育祭での障害物競走の内容や避難訓練の内容を他の生徒には知らせないが、生徒Aには事前に知らせ、体育祭の競技を事前に練習するなどの合理的配慮を行うことにより、活動に参加することができたことである。

5点目は、提言4「地域リソースの活用と連携」に関連した外部組織との連携である。校内だけの取り組みでは十分な支援にならず、中学校からの情報、家庭との連携、大学教員の遠隔システムによる助言がなければ効果的な支援を継続して行うことは難しかった。

このような取り組みにより、生徒Aの通級による指導が通常の学級で生かされ、様々な活動への参加状況やコミュニケーションへの様子が少しずつ変化し、行事参加が促されたと考える。

(2) 評価方法の工夫

評価は生徒自身が振り返るために毎時間ごとに記入する記録用紙と、通級担当がそれぞれの生徒の個別の課題について評価尺度を設定し、グラフにして表したもので行った。これらを定期的に本人、保護者にフィードバックした。生徒に達成感を持たせながら目標を確認することで、取り組みを定着させた。また自己理解を深め、新たな課題を見つけるために有効であった。

職員会でも評価に関して情報共有を行い、支援を続けた。「通級による指導と通常の学級の学習内容や学習方法の連携」⁴⁾によると、「目的の共有においては、個人の取組に焦点を当てず、全教職員で目的を共有し学校全体で通常の学級と通級による指導の連携を図ることの体制づくりが必要である」とあり、通級による指導の授業内容の目標や生徒の現状を周知し、学校全体で連携して

取り組む必要性を知らせたことで対象生徒の行動が目目され、行動の情報が集まり、次の支援につなげることができた。

(3) 国立特別支援教育総合研究所³⁾「通常の学級と通級による指導の学びの連続性を実現するための6つの提言」との関連

提言1「情報交換・情報共有の方策の検討」、提言2「授業を見合う体制づくりと工夫」についての取り組みには、第1に的確な実態把握に基づいた指導・支援ができる個別の指導計画を作成するために、学校全体で取り組んでいる授業公開週間以外も通級指導のための授業観察や授業担当者会を開き、各教科の学習過程における困難さについてとその支援方法についてケース会議を開いたことである。第2に、ケース会議以外にも授業担当の教員に生徒それぞれの困難さについて、授業場面でどのような状態であるか確認するためのチェックシートを依頼することや、個別に聞き取りを行うことを繰り返すことで情報交換を行い、通級による指導と通常の授業の連携ができるよう確認し、通級による指導の授業を行ったことである。

提言3「学校全体の取り組みとして展開」するための取り組みとしては、第1に月に1回に開かれる職員会で通級による指導の対象生徒の様子を撮影した動画を見ながら説明を行ったことが挙げられる。通常の学級での課題を通級でどのように支援しているのか説明することで対象生徒が持つ困難さへの理解が深まり、具体的な支援方法を示すことで通常の学級での対象生徒以外への支援にもつながった。第2に、教育相談の取り組みとして、すべての生徒を対象として毎月情報収集・情報共有を行い、校内外と連携をした生徒支援を行っている。また、年間を通じてインクルーシブの視点で授業を行うことができるよう黒板周りの情報量の調整や各教室に1～5の数字の磁石を配布し、授業内容を最初に示して見通しを持つことができる授業展開をお願いするなど通級指導以外の基本的な体制づくりと合わせて通級による指導への理解を広めたことである。

提言4「地域のリソースの活用と連携」することについては、本校は医療アドバイザー(医師)、SC、SSWが定期的に生徒や保護者、教員と面談等を行っており、通級による指導が必要な生徒かどうかの判断は、これらの専門家にも意見を伺い、検討したことである。提言6「校長のリーダーシップと教育委員会のバックアップ」もあり、地元大学教員に授業観察を依頼したことや、月に1回程度、遠隔会議システムを利用して、困難さの背景の分析、目標設定や指導計画、具体的な支援方法や支援の振り返りの方法

等について定期的な助言をいただき、指導計画の修正を行いながら実際の指導をより効果的に進めることができた。

提言5「研修の工夫」については、校内連携のための研修と通級担当者の指導力向上のための研修がある。1つ目の校内連携を進めるための外部講師による研修としては、教育相談の校内研修を、本校生徒の実態に応じた具体的な事例を挙げていただきながら年2回行い、また通級による指導のための校内研修は年1回行った。2つ目の通級担当者の指導力向上のための研修は、提言6「校長のリーダーシップと教育委員会のバックアップ」により、教育委員会が主催する研修に参加することや県内他校の通級による指導実践校の見学や遠隔会議システムを利用して情報共有を行うこと、教育委員会の共有フォルダで教材の共有をすること等により、本校の校内連携のあり方を確認し、実践力の向上を目指して研修を続けていることである。

6つの提言を参考にしながら、通級による指導を通常の授業と連携しながら進めた結果、生徒AについてはI期で活動に参加することが困難であったことがIII期にはほとんどの活動に参加できるようになった(図2)。また、「学校生活は充実しているか」の問いに対して、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」「どちらかと言えばあてはまらない」「あてはまらない」のうち、II期は「どちらかと言えばあてはまらない」であったが、III期には「どちらかと言えば当てはまる」と回答しており、少しずつ活動に参加できるようになったことが影響しているのではないかと考えられる。

(4) 結論

本研究では、高等学校における通級による指導を実践するにあたり、個別のニーズに基づいて行われる通級による指導での成果が、生徒が多く時間を過ごす通常の学級に生かされることを目指し、通級による指導と通常の学級の連携をさせるためにホーム担任・教科担当教員と連携した支援方法と効果の検討およびこれらの課題を明らかにすることを目的として実践研究を行った。

この研究の結果から、通常の学級と通級による指導が連携し、通常の学級に生かされるためには国立特別支援教育総合研究所³⁾の「通常の学級と通級による指導の学びの連続性を実現するための6つの提言」に基づいた支援体制によって有効な支援を行うことができたと言える。また、『「通級による指導」における2つの視点について考える』⁵⁾によれば、「個への支援、組織への支援、家庭への支援が互いに有機的に結びつき、対象児の学級での適応が改善された事例」が挙げられており、効果的な支援を行うためには6つの提言を個別の支援内容に応じてバランスよく

連携させることが必要であり、校内連携や校内と外部組織をつなぐ教育相談体制が大きな役割を果たしている。

高等学校における通級による指導は開始されたばかりで、高校での通級による指導に関する有効な支援方法や校内体制等について公表された客観的な記録が少ない。本研究の生徒Aに対する支援が先行研究から妥当であったかの検討が十分できていない。これらを課題とし、今後の高等学校における通級による指導に関する研究を進めていきたい。

文献

- 1) 平成28年12月9日「学校教育法施行規則の一部を改正する省令等の交付について(通知)」https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/1387824.htm.
- 2) 国立特別支援教育総合研究所(令和2年3月)『高等学校教員のための「通級による指導」ガイドブック 押さえておきたいQ&A』.
- 3) 国立特別支援教育総合研究所(平成30年3月)「特別支援教育における教育課程に関する総合的研究ー通常の学級と通級による指導の学びの連続性に焦点を当ててー」.
- 4) 関原真紀・佐野舞花(2020):通級による指導と通常の学級の学習内容・学習方法の連携ー教師の児童理解と指導力の向上を目指してー. 日本LD学会第29回大会(兵庫)(令和2年10月)大会論文集(オンライン).
- 5) 植木田潤・川村修弘・富川洋子・竹村洋子(2020):「通級による指導」における2つの視点について考えるーユニバーサルな支援とユニークな支援を繋ぐー(自主シンポジウム). 日本LD学会第29回大会(兵庫)(令和2年10月)大会論文集(オンライン).